はじめに

石上阿希

本書は、科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金〈若手研究（B）〉平成二三年度―二四年度、研究代表者：石上阿希、課題番号二三七二〇一二六）の助成を受けて開催した西川祐信研究会の成果報告である。西川祐信（一六七一―一七五〇）は、江戸中期に京都を拠点として活躍した浮世絵師であり、その画業は、風俗画から教訓絵本や着物雛形本、浮世草子の挿絵や画論、春本など多岐に亙る。

そもそも、祐信の研究を意識し始めたのは、春画を研究テーマとして選び、鈴木春信の「風流座敷八景」を研究した時だった。春信の春画・春本がいかに祐信に影響を受けていたのか、多くの事例に行き当たり、春信の春画を研究するならば、まず祐信を研究しなければならないと実感した。

その後、研究課題としての祐信を本格的に意識したのは、二〇一〇年の九月にロンドン大学アジア・アフリカ研究学院（SOAS）で開催された春画ワークショップであった。その日は、偶然にも私を含め三人が祐信の春本をテーマとして、美術史、文学史、社会史など多様な視座からの研究発表を行った。幅広い画業を為していた祐信だからこそ、彼の作品を考察することで、同時代の現象を多角的に浮き上がらせることが出来るのではないかと考えた。その日の懇親会では、同じくワークショップの発表者であった山本ゆかりさんといかに祐信という絵師が浮世絵研究にとって重要かという話で盛り上がり、これをテーマに科研費がとれたら、という結論になったことを覚えている。

それから一年後、運良く科研費若手研究（B）の助成を得ることが出来、国際日本文化研究センター早川聞多先生のご協力のもと、西川祐信研究会を開くことが出来た。本研究会では、文学史、美術史、服飾史、工芸史など様々な分野の研究者から、祐信に関する発表を行っていただいた。第一回を二〇一一年一二月に、第二回を二〇一二年八月に開催し、その発表をまとめたのが本論文集である。

論文の部、ゲルガナ・イワノワ氏の論文「近世の女性読者と古典の大衆化―西川祐信の『画本朝日山』を題材に―」では、江戸時代最初の『枕草子』のダイジェスト版である『画本朝日山』に着目し、祐信が江戸時代における古典作品の受容に大きな影響を与えたことを明らにした。古典を題材とした祐信絵本の読者の多くは、婦女子であった。彼女たちは、『徒然草』や『枕草子』だけでなく、和歌・漢詩などの知識を祐信絵本から学んでいた。また、『画本朝日山』が結婚を控えた婦女子が学ぶべき教養や心得を説いた教訓書としても読むことができるとし、教育に果たした役割について考察している。

山本ゆかり氏の論文「水辺の女――西川祐信画にみる水流と美人」は、水流と美人という画題の新出二点の祐信肉筆画を紹介し、表現と主題の二つの視座から祐信肉筆画の構造を解き明かしている。祐信の描く水流の表現方法は、やまと絵の影響を含みながらも当世風の新しさも兼ね備えている。肉筆画と版本を比較し、祐信が媒体によって構成や描き方を表現し分けていること指摘した。また、その主題に目を向ければ、水辺の女像の背景に古典世界が浮かび上がる。祐信の作画姿勢の一つとして、古典に当世を繋げるということがあったと考察している。

ジェニー・プレストン氏は、最も熱心に祐信を研究している一人である。残念ながらご都合がつかず、研究会でご発表頂くことは出来なかったが、氏のご研究の成果をぜひこの論文集で紹介したいと思い、日本語文、英語文ともに掲載することとなった。祐信の絵本に潜む政治的趣向は、プレストン氏の博士論文のテーマでもある。「戦いの示唆―西川祐信の武者絵」では、祐信の武者絵本の要素を読み解きながら、その中に込められた政治的メッセージを解き明かしている。祐信と政治というトピックはこれまでの祐信研究では述べられなかったものであるが、氏の論文は祐信の政治思想を視野に入れた研究の重要性を示している。

石上論文「訓蒙図彙と祐信絵本・春本」は、祐信の絵本・春本に見られるあらゆる階層の人々を描くという網羅主義趣向に着目し、その流れが上方の訓蒙図彙の隆盛に汲みするものであることを考察した。

研究ノートの部では、服飾史、工芸史の視点からみた祐信作品についてレポートしている。加茂瑞穂氏「祐信の服飾意匠とその特徴―風俗絵本と小袖雛形本を手がかりに」は、祐信の小袖雛形本と風俗絵本に見られる個々の意匠に着目し、使用されるモティーフを分類した。その中でも使用頻度の高い「水」、「菊」、「梅」を詳細に検討し、祐信が雛形本だけでなく、風俗絵

本を描く際にも意匠の選択に気を配っていたことを考察した。

ビンチク・モニカ氏の研究ノート「西川祐信作品の挿絵をもとにした漆器デザインについて」は、祐信絵本と漆器デザインの影響関係について明らかにした。祐信絵本は、明治に入っても重版され、長い間人々の需要があったことが知られているが、その人気の高さは漆器にも及んでいた。ビンチク氏はまた、浮世絵や版本のイメージが漆器デザインに取り入れられる背景に、南蛮屏風や洛中洛外図という新しい表現の流行があったことを指摘している。

こういった祐信研究を進める上で、基礎的な土台となるのが目録である。祐信の作品目録としては、松平進氏の労作『師宣・祐信絵本書誌』（青裳堂書店、一九八八年）が備わっているが、それ以外の分野については未だ整えられていない。研究会では、祐信が手掛けた浮世草子の挿絵に関する目録について、中嶋隆氏からご発表をいただいたが、この他にも、肉筆作品や版画、春画・春本などの目録作成が祐信研究の重要課題である。

目録部では、白倉敬彦氏の編による「西川祐信春画目録」を載せた。氏の長年の調査の蓄積に基づいた目録であり、三九点の情報が収録されている。

また、石上（編）として「西川祐信参考文献目録（稿）」も付した。本目録は日本の研究文献に限られており、欧米における成果を含めた目録は今後の課題とする。

巻末には、ジェニー・プレストン氏、ビンチク・モニカ氏の英語論文・研究ノートを載せている。

研究会を始めて改めて気づいたのは、ネットワークの軸としての祐信の面白さであった。古典と当世、上方と江戸、二次元と三次元、文学と政治、彼によって様々なものが繋がっていく。到底、二回ほどの研究会ではその繋がりの深さを解明することは出来ない。今後も研究会を続けて、さらに祐信と我々を繋げることが出来ればと考えている。